

紙本金地着色
本紙 各一五〇・八×三三四・二
江戸時代(十七世紀)

十六世紀、長崎に渡来するポルトガルを中心とした南蛮人や南蛮船の様子を描いた屏風を「南蛮屏風」と通称しているが、本図もその一つ。右隻には、コンパレー(大日傘)を従者に差しかけさせて悠然と南蛮寺に向かうカピタンを中心に、その後ろには様々な品を携えた一行が従い、その行き先である南蛮寺には、祭壇にキリスト像が掲げられている。南蛮寺の側の店先には、中国や南方の製品と思われる漆器や陶磁器などが並べられ、また行列上部に描かれる店の中では、女性が双六に興じている。これらの中で、商家が全て藁葺に描かれていることは、本図の祖型が商家の屋根を板葺きや瓦葺きに描く他の同種の屏風に比べて古いものであることを示しており、また教会内部やキリスト像を明確に描き入れていることは、慶長十七年(一六二二)のキリシタン禁令の影響を受ける以前の制作であろうことを示唆している。また左隻には、南蛮人が見守る中、沖合に停泊した南蛮船から品々が解船を使って陸揚げされる様子、また南蛮船上では秤を用いて生糸の値段を交渉して商談を進める商人の姿も描かれる。こうした南蛮船を通じての南蛮交易は、異国からもたらされる品々ばかりではなく、わが国からも様々な品が輸出され、文化や経済に活力を与えて豊かにしたのであった。

こうした近世初めの活発で豊かな文化、経済交流の一端を



右隻



左隻

示す本屏風は、徳川家康に縁の米迎院英長寺(静岡市葵区横内町)に伝来したもの。同寺は、慶長十四年(一六〇九)に家康によつて創建されと伝えられ、開山は家康の信任が厚かった廓山上人(一五七三―一六二五)。一説に、家康はこの寺で囲碁を楽しんだが、冬は隙間風があつて寒いために、その隙間風を防ぐために本屏風をこの寺に寄贈したのだと言う。文久元年(一八六一)に新宮高平によつて著された地誌『駿河志料』にも、同寺の紹介の中に家康「御手植楊梅」と共に「金屏風一双、大神君所賜なり」と本屏風が記され、屏風に描かれた図様が紹介されている。寺伝によれば、本屏風は慶長年間(一五九六―一六一五)にすでに同寺に入ったとされ、大切に伝えられてきた。この伝来を裏付けるように、近年、当館で行つた本屏風の解体修理の際、屏風内側の紙貼りに「英長寺「米迎院」等と記す墨書のある文書が含まれ、それらの年号からは十八世紀頃に解体修理を受けていることが判明している。

屏風は、明治二十二年(一八八九)一月十一日に明治天皇が前年に竣工した明治宮殿のある宮城へ赤坂仮皇居より徒御されたのに際し、家康より数えて徳川宗家第十六代となる徳川家達(一八六三―一九四〇)より皇室に献上された。因みに、寺に保管される屏風譲り受け書類は同年四月二十五日付、初代静岡県知事・関口隆吉が本屏風の今後の保存を懸念して家達に献納し、その対価として五百円を同寺に寄付されたことが知事本人によつて記されている。この書類や献上日から考えれば、本屏風が同寺より徳川家に渡されたのは前年だったのではないかと推察される。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

珍品ものがたり

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 58

編集 宮内庁三の丸尚蔵館
制作 株式会社 東京美術
翻訳 横溝廣子
発行 宮内庁
平成二十四年七月二十一日発行

© 2012, The Museum of the Imperial Collections